

否定表現の文脈依存性

石黒 圭

要旨

一般に否定表現は、単独では表現としての存在意義を持たず、対になる肯定表現との対立の中で初めてその存在意義を持つ。その対になる肯定表現、及びそれに関わる表現を含む文が当該の否定文の前後に現れ、そうした文に否定文が依存するという形で、その否定表現の存在意義が保証される。対になる肯定表現は、「ない」の有無に関わる表裏の対立、「～でないなら何なのか」という反問に媒介される交替の対立とに分かれ、この表裏の対立、交替の対立という観点と、否定文の先行文と後続文のどちらに、否定文の依存先の文が来るのかという観点から、否定文の文脈依存の型は、「表裏の対立—先行文依存」型（その接続関係は、表裏関係・因果関係・逆接・複合関係）、「表裏の対立—後続文依存」型（同、因果関係・逆接）、「交替の対立—後続文依存」型（同、代替・換言・累加）、「交替の対立—先行文依存」型（同、代替・換言）の四つに分けることができる。

キーワード 否定表現、文脈依存性、ない、表裏／交替の対立、先行文／後続文依存

1. はじめに

1-1. 本研究の目的

一文単独ではその意味を充足できない文がある。「指すこと」や「つなぐこと」をその中心的機能としている指示詞や接続詞を含む文はもちろんのこと、こうした要素がなくても、一文だけではどこことなく欠落感が感じられる文がある。たとえば、「日本の各大学が日本語教育に力を注ぐ。」という一文は、標題としてならともかく、独立した文とは言いがたい面がある。「その必要性を文部省が改めて強調した。」とか「そのための態勢作りが国公立・私立を問わずもう既に始まっている。」といった文が後にないと、この文の持つある種の不安全感が埋まらない。これは、状態動詞ではない動詞の辞書形で終わる文にみられる一つの特徴である*1。

同じことは否定文についても言えるだろう。「田中さんは来なかった。」という一文は単独ではどこことなく落ち着きが悪い。「来なかった」が強調されていれば、「その日、田中さんは来ることになっていた。（しかし）田中さんは来なかった。」のように先行の肯定文とセットになることで、「田中さんは」が強調されていれば、「田中さんは来なかった。（しかし）高橋さんは来た。」のように後続の肯定文とセットになることで、初めて否定文の持つある種の不安全感が埋められることになる。

否定表現は、多くの研究者によってこれまで指摘されてきた通り、それ自体では、表現

*1 真理や規則、手順などの一般性の高い表現、現在の習慣や知覚した瞬間の表現など、一部例外はある。

としての存在意義の極めて希薄な文である。「ある」ということを主張すれば、理解主体に対して一義的に決まる積極的な情報を伝えられるが、「ない」ということを主張しても、理解主体に対して極めて漠然とした消極的な情報しか伝えられないからである*²。しかし否定表現「ない」は、肯定表現「ある」との対立の中で、いわば対になる肯定表現に依存することによって、その表現としての存在意義を初めて獲得するのである*³。

本稿は、こうした性格を持つ否定表現を、文脈依存性という観点から考察することを目指すものである。否定表現が、対になる肯定表現との対立の中で初めて表現としての存在意義を持つ以上、対になる肯定表現、及びその肯定表現と何らかの論理関係を結ぶ別の肯定表現が、否定表現を含む文の前後の文脈に現れることは容易に想像がつく。したがって、そうした肯定表現が、否定表現とどのような対立を構成するか、及びどのような論理関係を結ぶかを記述することによって、本来それ自体では表現としての存在意義を有さない否定表現が、対になる肯定表現を含むその前後の文脈から、表現としての存在意義をどのように付与されていくのか、その仕方を考察していくことになろう。

1-2. 本研究の意義

上記のような考察を進めることによって、本稿は、理論的な面、教育的な面で、それぞれ以下のような貢献ができると考えている。

まず理論的な面であるが、これまでの連文論では、接続の機能を備えていることが明白な形態的指標である指示詞・接続詞に目が向けられており、接続の機能を専ら果たすわけではない形態的指標についてはあまり議論されては来なかった*⁴。しかし、否定表現に典型的に現れているように、文それ自体の持つ意味が文脈形成に潜在的な力を発揮するという見方を提示することによって、連文論の射程をさらに広げることが可能になる*⁵。

また教育的な面であるが、否定表現を含む文の前後に来る文の意味のタイプが頭に入っていれば、日本語学習者が当該の否定文と前後の文との関係を的確に把握できるようになり、文章理解の際の文脈把握力を向上させられるであろうし、日本語教師にとっても、否定表現の例文を導入する際に、適当な前後の文脈を作成するのに参考になるであろう。

* 2 中村(1981)は、否定表現のこのような性格について「ほとんど無数の事実を消極的にかかえているのである。」(55頁)と述べている。

* 3 佐久間(1943)は、このことについて「否定的表現の語法形式は、否定的なものに對立する肯定的命題の形を離れて獨立することが出来ない。いきなり否定的表現だけ持出して、そこに意味が盛り上がって来ない。」(109頁。原文は旧字体)と述べている。なお寺村(1979)で、否定表現「ない」を取り得ない文末形式について、興味深い考察がなされている。

* 4 しかし最近になって多方面で研究が進み始めている。たとえば庵(1997)、野田(1998)。

* 5 林(1990)を参照のこと。拙稿(1996)(1998)もその一つの試みである。

2. 調査の方法

ここで具体的な調査の方法について触れておく。『高校生のための文章読本』*⁶という、多様なジャンルの作品を含むアンソロジーの中から、文末の述部に「ない」を含む文を抜きだし、その文と前後の文脈との関係について検討を施した。

文末の述部に「ない」を含む文を機械的に拾い上げると、そこにはさまざまな慣用的な「ない」を含む表現が入ってくることになる。そのなかでも対立する肯定表現を想定できないような表現、たとえば可能性を表す「かもしれない」「にちがいない」、婉曲的な肯定を表す「のではないか」「ではないのか」、義務を表す「なければならない」「なくてはならない」、あきらめを表す「仕方がない」「やむを得ない」、類義的な肯定表現が想定できる「心もとない(＝不安だ、心配だ)」「かまわない(＝いい、大丈夫だ)」といった表現が目についたが、これらは典型的な否定表現が備えているような文脈依存性は備えていないので調査の対象からは外すことにする*⁷。

3. 調査の実際

実際の用例の分析を始める前に、分析の際に有効と考えられる観点をまずは示しておきたい。この観点には以下の2種類が存在する。一つは、表裏の対立と交替の対立という観点であり、もう一つは、否定表現を含む文が先行文に依存しているのか、後続文に依存しているのかという観点である。この2種類の観点を組み合わせると、2×2の計4通りとなり、この4通りの観点を軸に用例を分析していくことになる。

3-1. 表裏の対立と交替の対立

具体的な用例を検討する前に、この2種類の観点についてさらに詳しく見ておきたい。

既に述べたように、否定表現は肯定表現との対立の中で初めてその存在意義を持つ表現であるが、その否定表現と肯定表現の対立には大きく分けて2通り存在する。

- (1) 天気予報では今日は大雨が降ると言っていた。それなのに朝から晩まで雨は一滴も降らなかった。^{*8}

これは「降ると思っていたのに降らなかった。」という「降る」「降らない」の対立である。実際に言語化されるかどうかはともかくとしても、慣用化された否定表現を除いた

* 6 梅田卓夫他編(1986)『高校生のための文章読本』筑摩書房。ただし翻訳は除く。

* 7 その他、文脈依存性の低いものとしては、「しか」「ほど」といった限定性の強い語句を伴い、評価などの感情的意味を喚起するものがある。

* 8 用例にページ数があるものはすべて『高校生のための文章読本』からの引用である。ページ数がないものは作例である。また当該の否定文の否定表現「ない」には実線の下線を付し、その否定表現と対になる肯定表現には点線の下線を付した。

すべての否定表現の背後に、表裏の関係にある肯定表現が、「そうであると思っていたが」というある種の予見として存在していることを読み取ることは可能である。「降る」「降らない」に見られるようなこうした対立を、表裏の対立と名づけておく。

(2) 彼が読んでいるのは中国語の本ではない。日本語の本である。

それに対し、(2)で焦点が当たっているのは「中国語の本である」「中国語の本でない」という対立ではない。「中国語の本であるかどうか」からさらに一步進んだ「中国語の本でなければ何語の本なのか」を問題にしているのであり、その意味で「中国語の本でない」「日本語の本である」の対立に焦点が当たっていると言える。ある否定表現を受けて「～でないなら何なのか」という理解主体の中に生じる反問の答えを後続文に見出していくこのタイプの対立を、交替の対立と名づけておくことにする。

3-2. 先行文依存と後続文依存

さて、もう一つの観点は、否定表現を含む文が先行文と後続文、どちらの文に依存しているかという観点である。(1)でいうと、当該の否定文の先行文が依存先なので先行文依存となり、(2)では、当該の否定文の後続文が依存先なので後続文依存となる。(1)は「降る」「降らない」、(2)は「中国語の本ではない」「日本語の本である」、いずれも形態の上で明確な対立があるので依存先がすぐにわかる。

しかし以下の(3)(4)の例はどうであろうか。

(3) 今日は朝から曇っていた。だから洗濯物を干さなかった。

(4) 今日は朝から晴れていた。でも洗濯物は乾かなかった。

(3)に「干す」「干さない」、(4)に「乾く」「乾かない」という形態上の対立があるわけではない。しかし本稿では、(3)(4)とも後続文の否定表現が先行文に依存する先行文依存と考える。その理由については以下で述べる個々の記述の中で明らかにしていくつもりであるが、そのことについて前もって簡単に触れておくと、(3)でいえば「干さなかった」に対する「干す」という表現が先行文との因果関係の中に、(4)でいえば「乾かなかった」に対する「乾く」という表現が先行文との逆接の関係の中にそれぞれ隠れているのである。そうした対立関係は、先行文が存在しなければ立ち現れてこないものであり、そのため(3)(4)とも先行文依存と考えるのである。ただし、(1)(2)と(3)(4)はその性格の違いから、(1)(2)は形態上の対立のある直接的依存関係、(3)(4)は形態的には直接依存する先のない間接的依存関係のように、区別して考える必要はあるだろう。

3-3. 「表裏の対立—先行文依存」型

3-3-1. 表裏関係

(5) その日、田中さんは来ることになっていた。しかし当日、田中さんは来なかった。
本稿の冒頭で挙げた例である。「来なかった」という否定表現は、「来ると思っていた」

という表現主体の予見のもとで初めて成り立つ表現であり、その予見が先行文で言語化されている。これは、対になる肯定表現への直接的依存関係なので、理解が容易である。この論理を抽象化すると〈Aであると思うが、Aでない〉^{*9}と表せる。

3-3-2. 因果関係

3-3-1は、否定表現が対になる肯定表現に依存する直接的依存関係であったのに対し、3-3-2～3-3-4は否定表現が対をなしていない肯定表現に依存する間接的依存関係になる。

(6) 人間にはそれぞれ「分」というものがある。おまえが一生かかって飲む酒は、ちゃんと神様がその「分」を取っておいてくださる。だから、何もあわてて、無理をして飲むことはないではないか。(155 頁)

(6)において当該の否定文が直前の文と因果関係を結んでいることは「だから」という接続詞の存在から明らかである。ところが肝腎の、「飲むことはない」と表裏の対立をなす肯定表現が表現上どこにも現れていない。

しかし(6)において、「飲むことはない」に対立する肯定表現が表現の上で存在していないからといって、表裏の対立が意識されていないかという、そうではない。接続詞「だから」で結ばれるこの文は、論理学でいう誘導推論から導かれる〈「神様が「分」を取っておいてくださらない」ならば「あわてて、無理をして飲む必要がある」〉という内容を含意として含んでいるのである。この含意があるからこそ、本来単独では表現としての存在意義を持ち得ない否定表現「飲むことはない」がその存在意義を獲得するのである。つまり、因果関係が、誘導推論を介して、当該の否定表現と対になる肯定表現を意識化させることで、その否定表現を活性化させるのである。

以上まとめると、当該の否定表現は、〈「神様が「分」を取っておいてくださらない」ならば「あわてて、無理をして飲む必要があるだろう」が、「神様が「分」を取っておいてくださる」ので「何もあわてて、無理をして飲むことはない」〉という論理に支えられていることがわかる。この論理を抽象化すると〈(AでないならばBであると思うが、) AであるのでBでない〉となる。ただし()の中はほとんど言語化されることはない。

3-3-3. 逆接

(7) 先生の『刺す』を読んで、感動いたしました。でも、私はあのような心境には決してなれません。(124 頁)

*9 論理式の中の「と思う」は、「べきだ」などの当為表現、「はずだ」などの可能性表現、「たい」などの希望表現、「ものだ」などの一般性表現、つまり言語主体の頭の中で想定されたことを表す表現を一括して示すものとする。

ここでいう先生とはこの文章の筆者である宇野千代、私とは宇野千代のもとに「夫に捨てられて死にたい」という手紙を寄越したある女性読者である。自分自身の体験から「夫がよその女と一緒にになったからといって、決して追いかけたり思い詰めたりしてはいけない」と『刺す』の中で説く宇野千代に対して、この女性読者は「あのような心境には決してなれない」と手紙の中で主張するのである。

(7)では接続詞「でも」の存在から当該の否定文が先行文と逆接を構成していることはわかるが、(6)と同様、「なれる」「なれない」の対立は、形態上は想定できても、表現上は見えない。しかしここでも表裏の対立は言語主体に意識されているのである。そのことは逆接という表現が前提を下敷きにして成立していることを考えれば明白である(西原1985)。つまり(7)では、〈一般的には「『刺す』を読んで、感動した」のならば「あのような心境になれるはずだ」〉という前提があり、その前提と矛盾する形で〈私は「あのような心境になれない」〉という表現が成立しているのである。こうして考えると、逆接は、そもそも表現の原理として、対立する肯定表現と否定表現をともに内包しているといえる。

(7)をもとに逆接についてまとめると、否定表現と、対になる肯定表現との対立は、〈一般的には「『刺す』を読んで、感動した」のならば「あのような心境になれるはずだ」が、私は「『刺す』を読んで、感動した」のに「あのような心境になれない」〉と考えることで顕在化する。この論理を抽象化すると〈(AであるならばBであると思うが、) AであるのにBでない〉となる。ただし()の中はほとんど言語化されることはない。

3-3-4. 複合関係

(8) 書き方が誠実で、私にはその人の気持ちはよく分かる。しかし、私は返事が書けない。返事を書くと、間違われやすいからだ。(125頁)*10

(8)は(7)の続きで、ある女性読者から送られた手紙を読み終えた宇野千代が、自らの心情を描写している部分である。

(8)を論理的に整理してみると、〈「書き方が誠実で、その人の気持ちはよく分かる」のならば「返事が書けるはずだ」が、「書き方が誠実で、その人の気持ちはよく分かる」のに「返事が書けない」〉という3-3-3の論理と、〈「返事を書いても、間違われぬ」ならば「返事が書きたい」が、「返事を書くと、間違われやすい」ので「返事が書けない」〉という3-3-2の論理とが組み合わさった形である。つまり、複合関係とは因果関係と逆接が複合したものである。この論理を抽象化すると〈(AであるならばBであると思うが、) Aであるのに(CでないならばBであると思うが、) CであるのでBでない〉とな

*10 「しかし、私は返事が書けない。返事を書くと、間違われやすいからだ。」は形の上では後続文依存であるが、論理的には「返事を書くと、間違われやすい。だから、私は返事が書けない。」と同等なので、ここではこの例を先行文依存に準じて扱うことにする。

る。ただし（ ）の中はほとんど言語化されることはない。

以上、3-3-2～3-3-4の間接的文脈依存性のポイントは、否定文は先行文と因果関係や逆接を形成していることが多いこと、そしてその因果関係や逆接を手がかりに、背後にある言語化されていない表裏の関係を言語主体が意識していること、この2点に尽くされる。

3-4. 「表裏の対立—後続文依存」型

3-4-1. 因果関係

「表裏の対立—後続文依存」型には直接的依存関係、つまり表裏関係が存在しない*11。したがって、間接的依存関係のもののみを見ていきたい。

(9) しかし、彼らはまだ、彼女が完全に自分たちをだましたと信じることはできなかった。彼らは、カテリーナとの約束通り、馬鹿みたいに待ち続けた。(202 頁)

(9)は同じく因果関係を表す3-3-2から類比的に考えることが出来るだろう。ただ因果関係の前件に否定が来るのがその大きな違いである。具体的には〈「彼女がだましたと信じるのができた」ならば「彼らは馬鹿みたいに待ち続けることはなかったのだ」が、「彼女がだましたと信じるのができなかった」ので「彼らは馬鹿みたいに待ち続けた」〉となる。この論理を抽象化すると〈(AであるならばBでないと思うが、) AでないのでBである〉となる。つまり、3-3-2の論理式のAおよびBに付随する肯定否定をそれぞれ逆転してやると、この論理式になる。

3-4-2. 逆接

ここでは例文に入る前に、一つ作例を見ておきたい。「悲しくはない。なのに涙が出る。」という例において、「悲しければ涙が出るのは当然だが」という前提が隠れていることを探るのは容易であろう。そのことは〈「悲しい」ならば「涙は出るものだ」が、「悲しくない」のに「涙が出る」〉とまとめられる。具体例を見てみたい。

(10) 反語家はその本質上誤解されることを避け得ません。しかし彼はそれを平気で甘受し、否、ひそかにこれを快としているほどに悪魔的でさえあります。(91 頁)

だれでも誤解されるのはいやなものであるから〈普通の人には「誤解されることを避け得る」ならば「それを甘受し快とするものだ」が、反語家は「誤解されることを避け得ない」

*11 1 なぜ「表裏の対立—後続文依存」型には表裏関係が存在しないのかというと、4章の③の「表裏の対立」を確認すればわかるように、言語化される部分に違いこそあれ、すべて、「と思うが」の後件に当該の否定表現、前件にそれと対になる肯定表現という組み合わせになっている。つまり〈「予見としての肯定」と思うが「現実としての否定」〉という発想が表裏の対立のベースになっているのである。したがって、その順序を逆にする「表裏の対立—後続文依存」型の表裏関係は存在し得ないのである。

のに「それを甘受し快とする」)。そこが反語家の悪魔的なところだというのがこの文の論理なのであろう。この論理を抽象化すると、〈(AであるならばBであると思うが、) AでないのにBである〉となる。

ちなみに、前件から因果関係と逆接に同時に発展することは論理的にあり得ないので、3-3-4の複合関係のように因果関係と逆接が重なることはない。

3-5. 「交替の対立—後続文依存」型

3-5-1. 代替

(11)は、ニュートンとエリザベスの二人がリング園を散策しているときの会話である。

(11)「君にたずねたんじゃない。」ニュートンはいった。

「じゃ、だれにたずねたの？ ここには私たち二人しかいないわ。」

「私は、宇宙にたずねたのだ。」ニュートンの答えは、素っ気なかった。(126頁)

(11)は会話文であるが、それゆえに交替の対立の論理を如実に表している。仮に(11)のニュートンの発言が地の文であって、エリザベスの発言がなかったとしても、「君にたずねたんじゃない。」という否定表現は、エリザベスが実際に口にした「じゃ、だれにたずねたの？」という反問と同じ反問を読み手の中に喚起するだろう(野田1997)。

その反問を喚起する力はニュートンの発言にある「んじゃない」である。「んじゃない」つまり「のではない」が動詞述語文または形容詞述語文につくと、一般に交替の対立を起こしやすくなる。また、交替する成分を明示したければ、

(12) 原点へ置きのこした一人の死者という発想を私に生んだのは、いうまでもなく
広島ではない。その発想を私にしいたのは、シベリヤのラーゲリである。(97頁)
のように「～のは…ではない」という文型に当てはめればよい。また、いわゆる対比の「は」を使って、交替の対立を表す方法もある。

以上のように、動詞述語文や形容詞述語文においては、交替の対立を起こすときにはそれが言語形式にはっきり現れることが多い。一方、名詞述語文については、(13)のように、特にはっきりした言語形式は持たなくても、交替の対立が意識されることが多い。

(13) どもりはあともどりではない。前進だ。(13頁)

3-5-2. 換言

さて、これまで述べてきた交替の対立は〈AでなくてBである〉という論理式におさまるものであった。こうした論理式におさまるものをひとまず代替と名づけておくことにするが、〈AでなくてBである〉という論理式におさまるすべての交替の対立が代替と呼べるわけではない。

(14) この電車の行き先は渋谷ではない。新宿である。

(15) その女の子の通っている高校は女子校ではない。共学である。

(14)と(15)の最も大きな違いは、当該文の否定表現と後続文の肯定表現が等価になるかどうかである。(14)では、渋谷ではない駅は新宿の他に東京・池袋・上野などたくさんあるので、「渋谷ではない」⇔「新宿である」であるが、(15)では、女の子にとっては通っている高校が「女子校ではない」⇔「共学である」である。(14)は2文を媒介する適当な接続詞がないのに対し、(15)は「すなわち」「つまり」といった接続詞で2文をつなぐことができることから、(14)と(15)は論理的に異なると考えられるので、(15)を特に換言と名づけて区別しておくことにする。

ここで改めて代替と換言について整理しておきたい。「AでなくてBである」という論理式におさまるもののうち、「Aでない」なら何なのだという反問に答え、「Bである」で新たな絞り込まれた情報を提示するものを代替、「Aでない」と「Bである」が等価な情報と考えられるものを換言と呼ぶことにする。

ただ、代替と換言は同じ論理式で語られるように、本来は似たもの同士であり、

(16a) 彼の話している言葉は日本語ではない。ドイツ語である。

の「ドイツ語」のように個別言語であれば、前後の文の関係は代替になるが、

(16b) 彼の話している言葉は日本語ではない。外国語である^{*12}。

の「外国語」のような個別言語をくくる語が存在する場合、前後の文の関係は換言になる。

代替の用例については既に見てきたので、ここでは換言の用例について見てみたい。

(17) もう一度、良人のもとに帰れなければ生きてはいられません。いえ、いま、たったいま、死んでしまいたい気持ちでございます。(124頁)

「生きてはいられません」と「死んでしまいたい」はほぼ同義と考えられるだろう。もっとも、まったく同義であれば同義の表現を繰り返して言語化する意味はないと考えられるので、実際には意味が若干ずれるものである。

3-5-3. 累加

さらに、代替にも換言にもおさまらないものとして累加がある。

(18) よい文章とは

- ① 自分にしか書けないことを
- ② だれが読んでもわかるように書く

という二つの条件を満たしたもののことだ。「だれが読んでもわかるように」ということは、言葉の意味がわかるということも含んでいるが、それだけではない。

「自分にしか書けないこと」、自分だけの発見や経験をできるだけ正確に言葉に表現するということを指している。(18頁)

*12 ここでは「きちんとした日本語になっていない」という比喩的解釈は考慮しない。

この累加は「だけではない」「にとどまらない」「ばかりでない」などの指標を伴うので判断がつきやすい。

3-6. 「交替の対立—先行文依存」型

ここでは、3-5で扱ったもののうち、代替と換言について論じる。累加を扱わないのは、代替と換言がともに〈AでなくてBである〉という論理式におさまリ、〈BであってAでない〉という入れ替えが可能であるのに対し、累加は〈AだけでなくBである〉という論理式におさまるため、その順序性が強く、先行文依存にはなりにくいからである。

3-6-1. 代替

(19) パリを去る日、僕は、なじみになったボーイに、五フランやって、その貼り札
をものにしたのである。けっして無断で盗んできたのではない。(107 頁)

(19)は代替の例と考えられる。お金を出してボーイから買ったのは、盗まないで手に入れたことの一つの可能性だからである。

3-6-2. 換言

(20) 小さい洗濯板で手洗いする私の足袋は、洗うたびに、ほんのすこしずつ色がつ
いてくる。よく見ると、なんとなく赤茶けている。でも私は——それでいい、
と思っている。使い古してくたびれた布地を、真っ白にしたい、とは思わない。
(151 頁)

一方、(20)は換言の例と考えられる。それまでの文脈の説明が多少必要かもしれないので補足しておく、女優である筆者が自分の白足袋を白く染めるかどうかに話しの焦点が当たっているところである。したがって、そうした文脈で、真っ白にしたいとは思わないということは、そのままでもいいと思っていることと等価であると考えられる。

4. おわりに

本稿がこれまで議論してきたことをまとめ、以下を本稿の結論とする。

- ① 慣用的な否定及び限定的語句を伴う否定を除き、否定表現は、単独では表現としての存在意義を持たず、対になる肯定表現との対立の中で初めてその存在意義を持つ。その対になる肯定表現、及びそれに関わる表現を含む文が当該の否定文の前後に現れ、そうした文に否定文が依存するという形で、その否定表現の存在意義が保証される。
- ② 対になる肯定表現は、「ない」の有無に関わる表裏の対立、「～でないなら何なのか」という反問に媒介される交替の対立とに分かれ、この表裏の対立、交替の対

立という観点と、否定文の先行文と後続文のどちらに、否定文の依存先の文が来るのかという観点から、否定文の文脈依存の型は、「表裏の対立—先行文依存」型、「表裏の対立—後続文依存」型、「交替の対立—後続文依存」型、「交替の対立—先行文依存」型の四つに分けることができる。

③ この四つの型それぞれから論理式の形で表すと以下のようになる。

「表裏の対立—先行文依存」型

表裏関係 〈Aであると思うが、Aでない〉

因果関係 〈(AでないならばBであると思うが、) AであるのでBでない〉

逆接 〈(AであるならばBであると思うが、) AであるのにBでない〉

複合関係 〈(AであるならばBであると思うが、) Aであるのに (CでないならばBであると思うが、) CであるのでBでない〉

「表裏の対立—後続文依存」型

因果関係 〈(AであるならばBでないと思うが、) AでないのでBである〉

逆接 〈(AであるならばBであると思うが、) AでないのにBである〉

「交替の対立—後続文依存」型

代替 〈AでなくてBである〉(ただし $\sim A \supset B$)

換言 〈AでなくてBである〉(ただし $\sim A \equiv B$)

累加 〈AだけでなくBである〉

「交替の対立—先行文依存」型

代替 〈AであってBでない〉(ただし $A \subset \sim B$)

換言 〈AであってBでない〉(ただし $A \equiv \sim B$)

【参考文献】

- 庵 功雄(1997)「「は」と「が」の選択に関わる一要因——定情報名詞句のマーカ―の選択要因との関連からの考察」『国語学』188
- 石黒 圭(1996)「予測の読み——連文論への一試論」『表現研究』64
- (1998)「文間を読む——連文論への一試論」『表現研究』67
- 佐久間鼎(1943)「否定的表現の意義」『日本語の言語理論的研究』三省堂
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」『英語と日本語と』くろしお出版
- 中村 明(1981)「否定というレトリック」『翻訳の世界』6-8
- 西原鈴子(1985)「逆接的表現における三つのパターン」『日本語教育』56
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194
- 林 四郎(1990)「文の成立事情——文章論的文論への序説」『国語学』160

